

ブックガイド

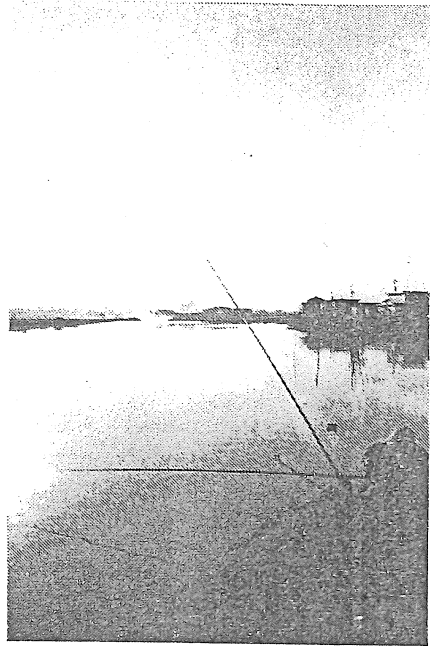
ぶらり釣り行

大崎紀夫・文 小形又男、樋口一成・写真

ローカル線や湯治場などの探訪記や紀行文をもっている著者による全国縦断釣り日記である。北は北海道から沖縄までの58か所の有名無名の河川湖沼を訪れ、釣のしかけや餌そして成果についてはもちろんのこと、四季折々の風物、各地の釣を通しての人々とのふれあいを描き出している。二人のカメラマンによるカラー写真は本書の約半分のスペースを占める。この種の本にありがちな説明的写真でなく、釣の「詩情」をたくみに写し撮っていて、釣り人でない人をもおもしろくひきこむ魅力がある。

釣り場への交通機関の案内図と簡単な説明があり便利。水の音、風の音が聞こえてくるようだ。

(22.5×20.7cm・121頁・2800円・朝日新聞社)



ホメイニー

「おいたちとイラン革命」
ハインツ・ヌスパウマー著
アジア現代史研究所訳

ホメイニーの指導の下、アッラーの名において強大なシャー体制を打倒し、イスラーム国家を建設しようとするイランは、バニサドル大統領の解任という事態を迎え、一層混迷の度を増している。神の導きによって闘われ、実際に勝利を収めたこの国を、西欧諸国は「現代から中世への逆もどり」と見たがるが、それは正しいのか。

本書は、オーストリアのジャーナリストで、中東問題にキャリアをもつ著者の手になるもの。内容は、ホメイニーの生い立ちやシャーに対する抵抗の足取りと、イラン史とを重ね合わせて記述してある。強大な権力を誇ったシャーの「白い革命」は、イスラームの伝統的社会を破壊し、西欧型工業社会の欠陥を拡大した形で民衆に押しつける結果になった。ホメイニー福音「生きる」ことの本義は、簡素、自由、公共善にあり、人々の心を強く捉える経過は、西欧型近代に悩む我々の心をもゆり動かすのだ。(B6判・二四五頁・一六〇〇円・社会思想社)

異境への往還から

八木秋子 著作集Ⅲ
八木秋子著

著者は一八九五年生まれ。若い頃雑誌記者、教師、新聞記者などを経て、『女人芸術』『婦人戦線』の編集に参加。その後アナキズムの実践活動で逮捕され、出獄後渡満、満鉄に勤務した。敗戦で引揚げ後母子寮の寮母として勤務、五年前より東京都養育院に在任している。



この著作集は、著者のアナキズムの思想と生き方に共感する相京範昭(編集担当)が、彼女の養育院入りを機に発行を始めたもの。本書に収録されているのは、戦後発表した文章、彼女がかかわった「土曜会」の会報の文章は、母子寮時代を中心とした日記などである。著者の格闘ともいえる対象(人)との対し方、それを客観的に見詰める姿勢などは、我々の心をつくものだ。(A5判・二八七頁・二〇〇〇円・JCA出版)

ポーランドの道

「社会主義・虚偽から真実へ」
工藤幸雄 著
筑紫哲也 著

八〇年夏、グダンスクに始まった独立・自治労組「連帯」の運動が我々の関心をひきつけるのは何故だろう。蜂起と亡国の歴史をもつ小国への、判官びいきともいえるべき心情か。それとも日本で脅威が声高に論じられているソ連を相手にした、「しなやかさ」と「したたかさ」の入りまじった抵抗性の小気味よさか。あるいは二一世紀の社会主義がどこに向うのかの実験場ともいえる性質の故だろうか。いずれにせよ、ポーランド研究者と行動する国際派のニュースキヤスターの手になる本書は、ポーランドの情勢を知り、考える上で貴重である。内容は、ストライキ労働者の始まり、連帯のリーダー、知識人たちのインタビュー、グダンスクの闘いの全記録、歴史的な政労交渉の経過などを折りこんで、この闘いの起った経緯、当面する問題などを浮き彫りにする。ワレサ訪日の七日間の密着取材も歯切れがよい。(B6判・二七九頁・一五〇〇円・サイマル出版会)